

フィリピンにおけるマングローブ林による災害リスク軽減と管理 (DRRM) : 超大型台風ハイエンからの教訓

ロデル・D・ラスコ

史上最強クラスの台風として、フィリピンに甚大な被害をもたらした台風 24 号 (ハイエン) に襲われた際、マングローブの森が台風の被害を軽減したという逸話があります。その真偽を確かめるために、フィリピン中部のサマル州とレイテ州の被災者 870 世帯を対象に調査を行いました。その結果、マングローブの保護機能を認識している回答者が最も少なかったのは、マングローブ林の面積、幅、種の豊富さが最も低い場所に住んでいる人たちでした。一方、マングローブの面積、幅、種の豊富さが最も高い場所では、ほとんどの回答者がマングローブが果たす保護機能を認識していました。マングローブのある沿岸地域では、マングローブのない地域に比べて、台風による住宅被害が少ないことが分かりました。マングローブの恩恵についての認識は高いものの、マングローブの再生への参加率は低いままです。プレゼンテーションの最後には、フィリピンのマングローブ林の炭素貯蔵・吸収量の推定について説明しています。

ロデル・D・ラスコ (Rodel D. Lasco)

オスカー・M・ロペス・センター エグゼクティブ・ディレクター

ラスコ博士は、自然資源管理と気候変動の分野で 40 年以上の研究開発の経験を有する。近日公開予定の第 6 次評価報告書 (AR6) を含む IPCC 報告書の著者でもある。エビデンスに基づいた気候変動適応策の推進を目的としたフィリピンの財団、オスカー・M・ロペス・センターのエグゼクティブ・ディレクターを務める。またフィリピン大学ロスバニョス校の客員教授も務めている。